2019 年度　学生による授業アンケート結果

１．2019 年度 授業アンケートの実施要領

１）授業アンケートの対象科目

全ての授業形態（講義・演習・実験・実技・実習）の科目をアンケート対象とする。但し、受講者数５名未満の科目は担当教員が実施の可否を判断する。また、対象科目の選定に関する担当教員の希望はとらない。

２）実施期間

前期：2019 年 7 月 1 日(月)～7 月 27 日(土)
後期：2020 年 1 月 6 日(月)～2 月 1 日(土)

３）授業アンケートの質問

設問１：この授業へのあなたの出席状況について答えて下さい。(選択式：択一)
回答群　ａ：毎回出席した ／ ｂ　：2/3 より多く出席した ／ ｃ：1/3 以上欠席した

設問２：この授業の内容はシラバス（授業計画）通りのものでしたか？（選択式：択一）
回答群　ａ：全くシラバス通りだった ／　ｂ：おおむねシラバス通りだった ／
ｃ：シラバスと少し違っていた ／ ｄ：シラバスと全く違っていた ／
ｅ：シラバスを読んでいないので判断できない

設問３：この授業に対するあなたの満足度について答えて下さい（選択式：択一）
回答群　ａ：大変満足している ／ ｂ：まあまあ満足している ／
ｃ：あまり満足していない ／ ｄ：全く満足していない ／ ｅ：どちらともいえない

設問４：『設問 3』で『ａ』あるいは『ｂ』と答えた理由は何ですか？（選択式：択一）
回答群　ａ：授業がよく理解できたから ／ ｂ：授業がまあまあ理解できたから ／
ｃ：(理解とは関係なく）学修に有意義だと思ったから ／ ｄ：学修意欲が喚起されたから
ｅ：その他（自由記述：　　）／

設問５：『設問 3』で『ｃ』『ｄ』あるいは『ｅ』と答えた理由は何ですか？（選択式：択一）
回答群　ａ：授業が全く理解できなかったから ／ ｂ：授業があまり理解できなかったから ／
ｃ：学修に有意義でないと思ったから ／ ｄ：学修意欲が喚起されなかったから ／
ｅ：その他（自由記述：　　）／

設問６：あなたは 1 回あたりの授業に対して、予習・復習をどの程度しましたか？(選択式：択一)
回答群　ａ：90 分以上 ／ ｂ：90 分程度 ／ ｃ：60 分程度 ／ ｄ：30 分程度 ／
ｅ：しなかった

設問７：あなたはこの授業がよりよいものであるためには、どのような授業であったらよいと思いますか？（選択式：２つまで選択可）
回答群　ａ：主に知識や技能・技術を学ぶ授業 ／ ｂ：(受講生の数に関係なく）自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業 ／ ｃ：プレゼンテーションやディスカッションの方法を学ぶ授業 ／ ｄ：知的におもしろいと思える授業 ／ ｅ：特に希望はない
ｆ：その他（自由記述：　　）／

４）集計方法・区分

アンケート結果の集計は以下の区分で集計する。

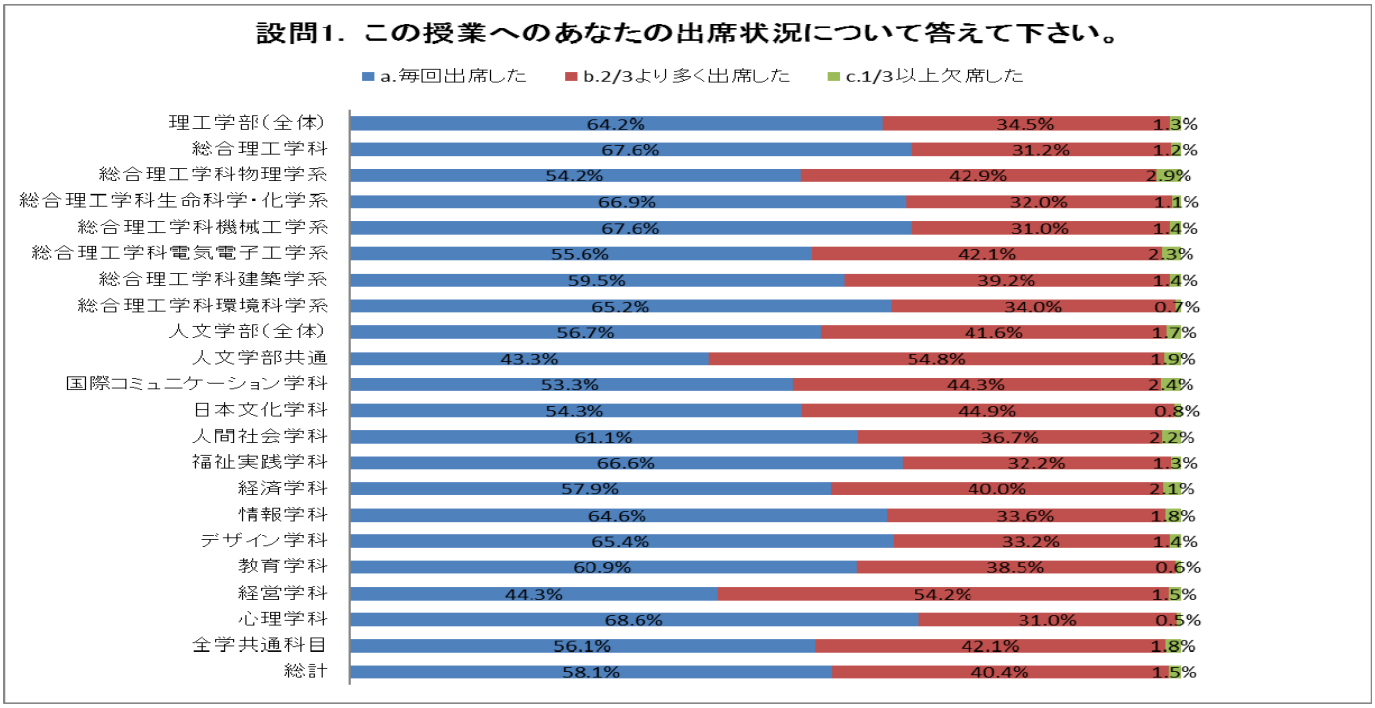
①授業科目区分別（全学共通科目、学部共通科目、学科科目、教職・資格科目）
②授業形態別（講義・演習・実験・実技・実習等）
③受講者数別（0～20 人、21～50 人、51～100 人、101～200 人、201 人以上）
④担当教員所属の学部別
⑤担当教員所属の学科・全学共通教育
⑥個人別

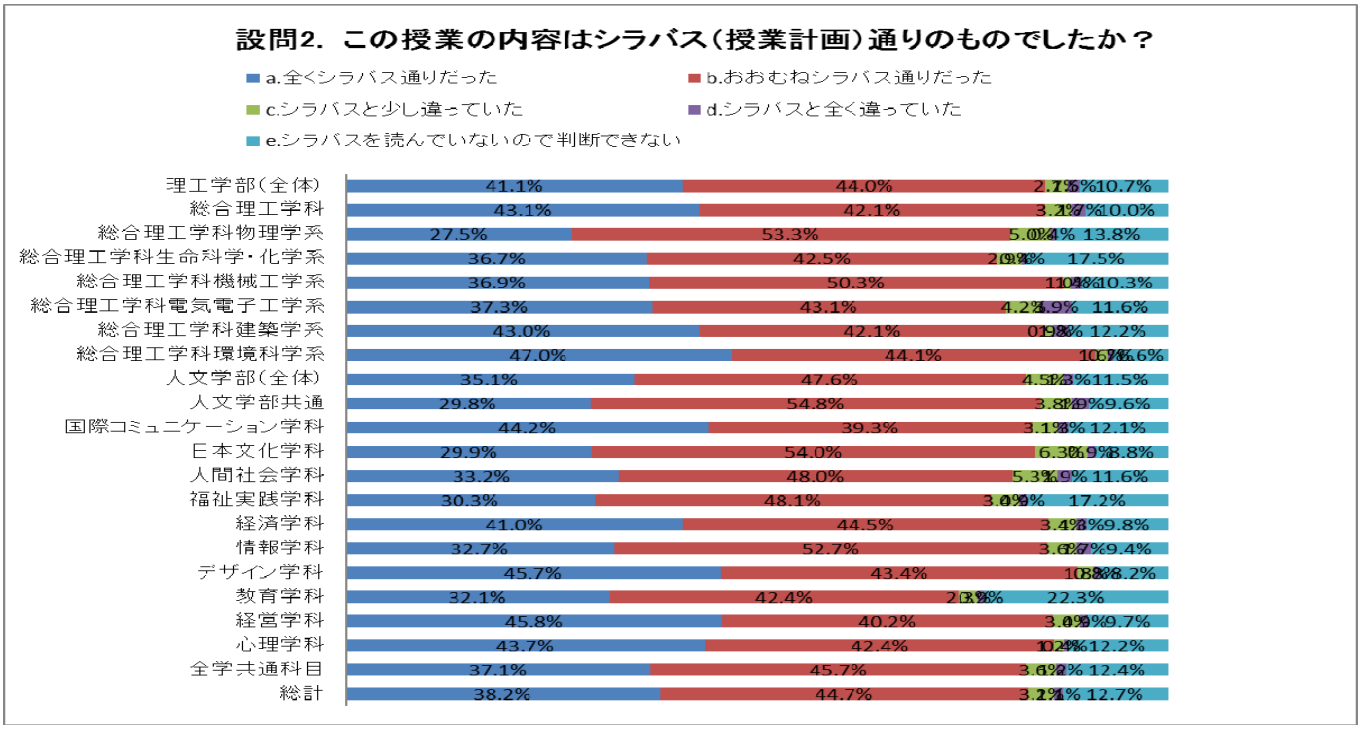
２．2019 年度 授業アンケートの集計結果

１）対象授業数・回答者数

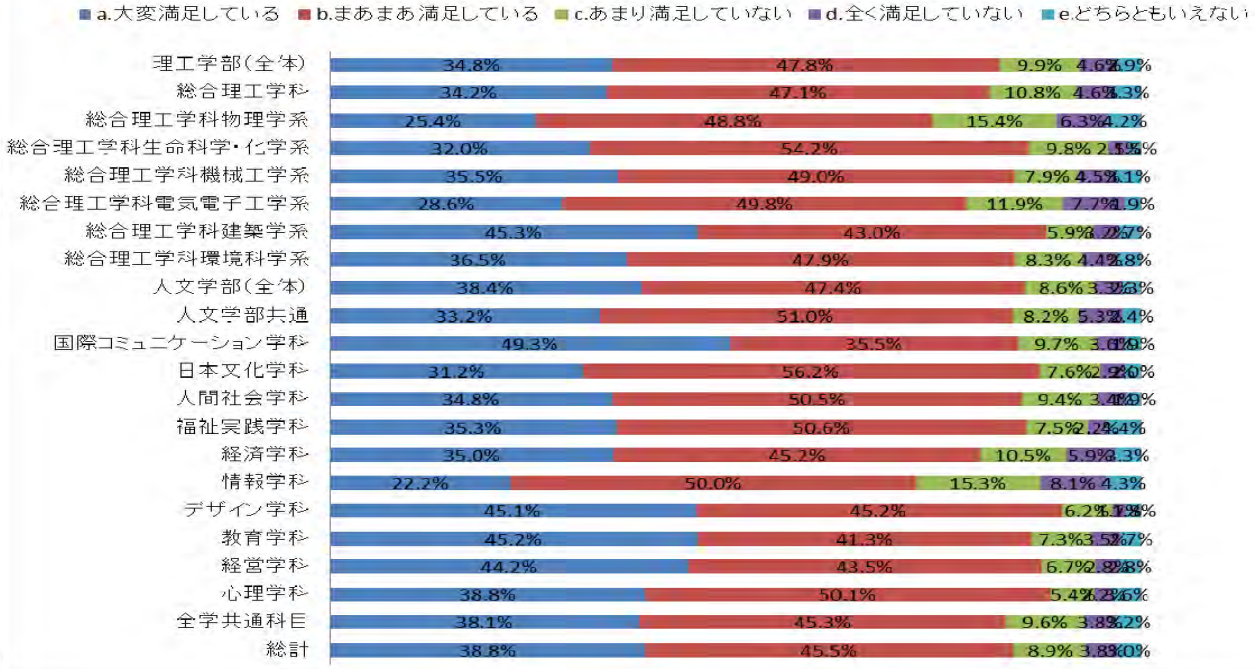
前期：　2496 科目（対象時間割科目数）　回答者数 28560（延べ数）
後期：　2344 科目（対象時間割科目数）　回答者数 20758（延べ数）

２）前期集計結果

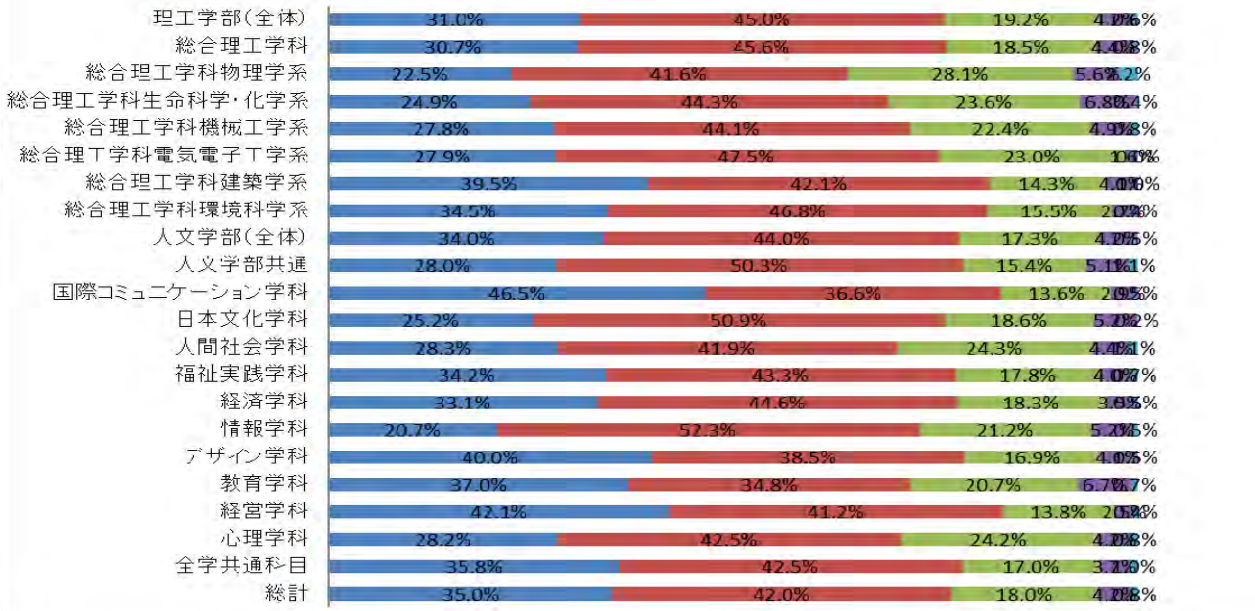




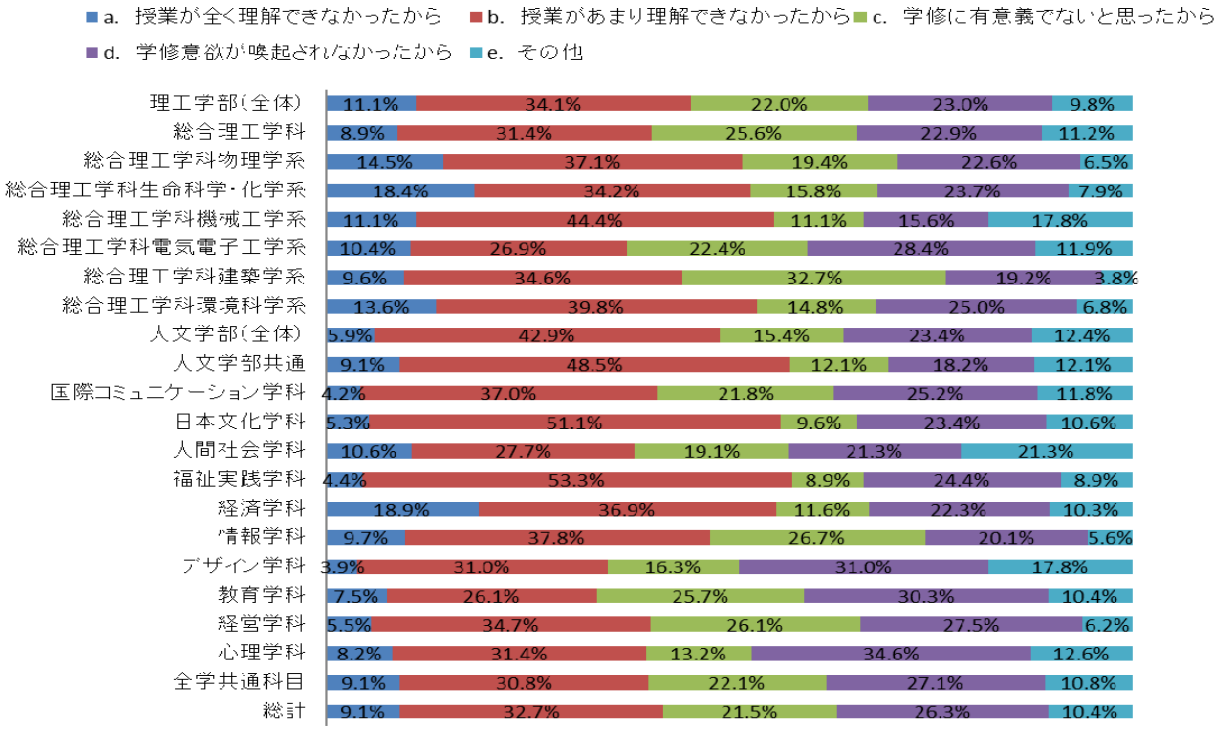
設問3. この授業に対するあなたの満足度について答えて下さい。



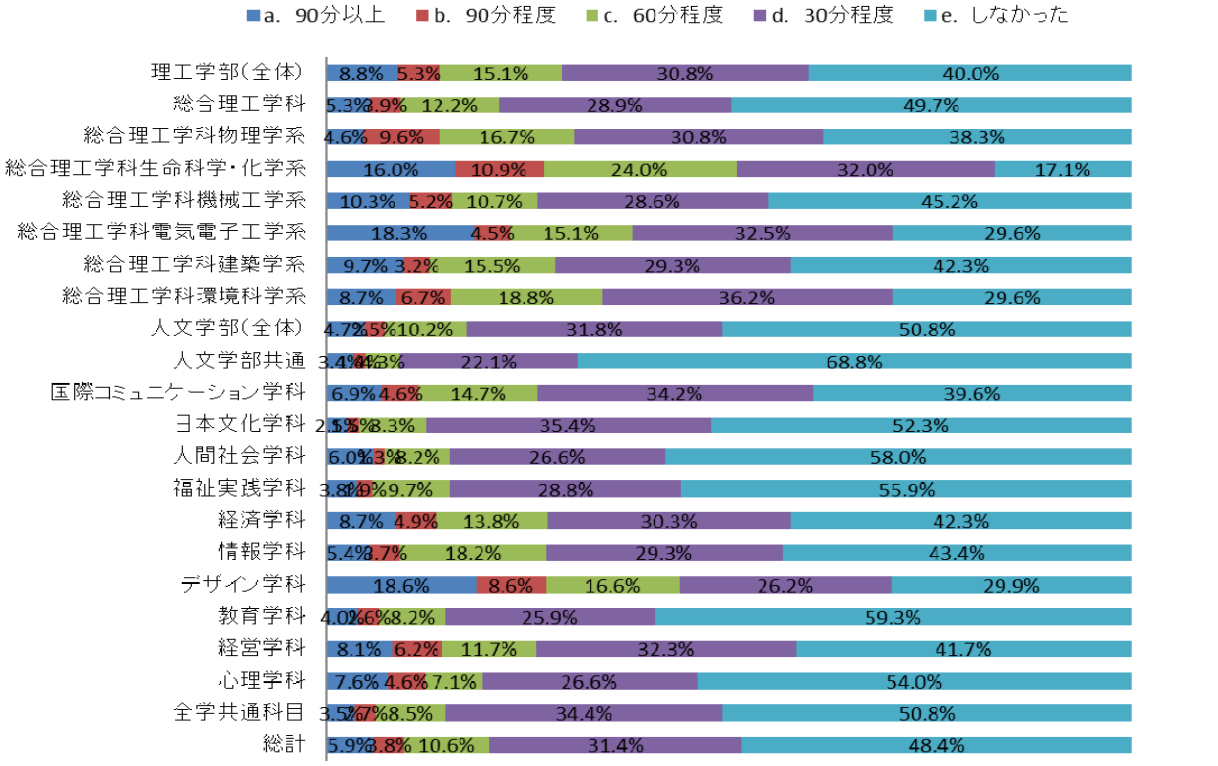
設問4. 『設問3』で『a』あるいは『b』と答えた理由は何ですか？



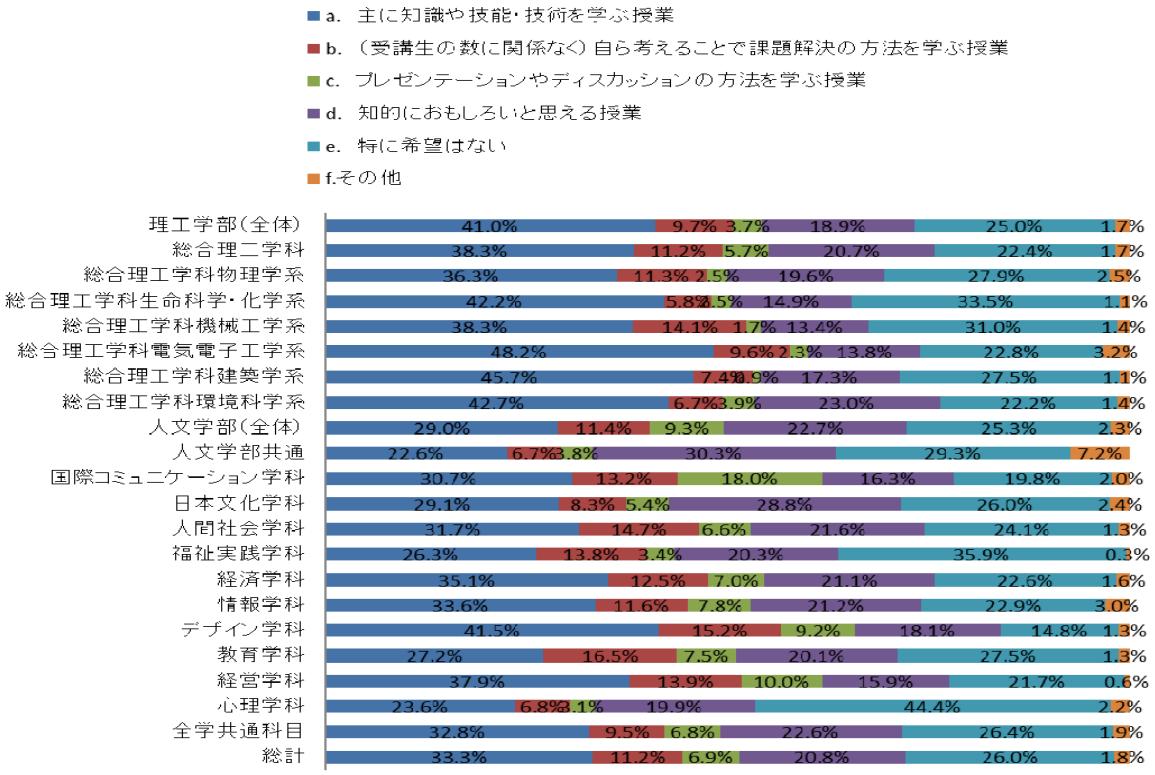
設問5. 『設問3』で『c』『d』あるいは『e』と答えた理由は何ですか？



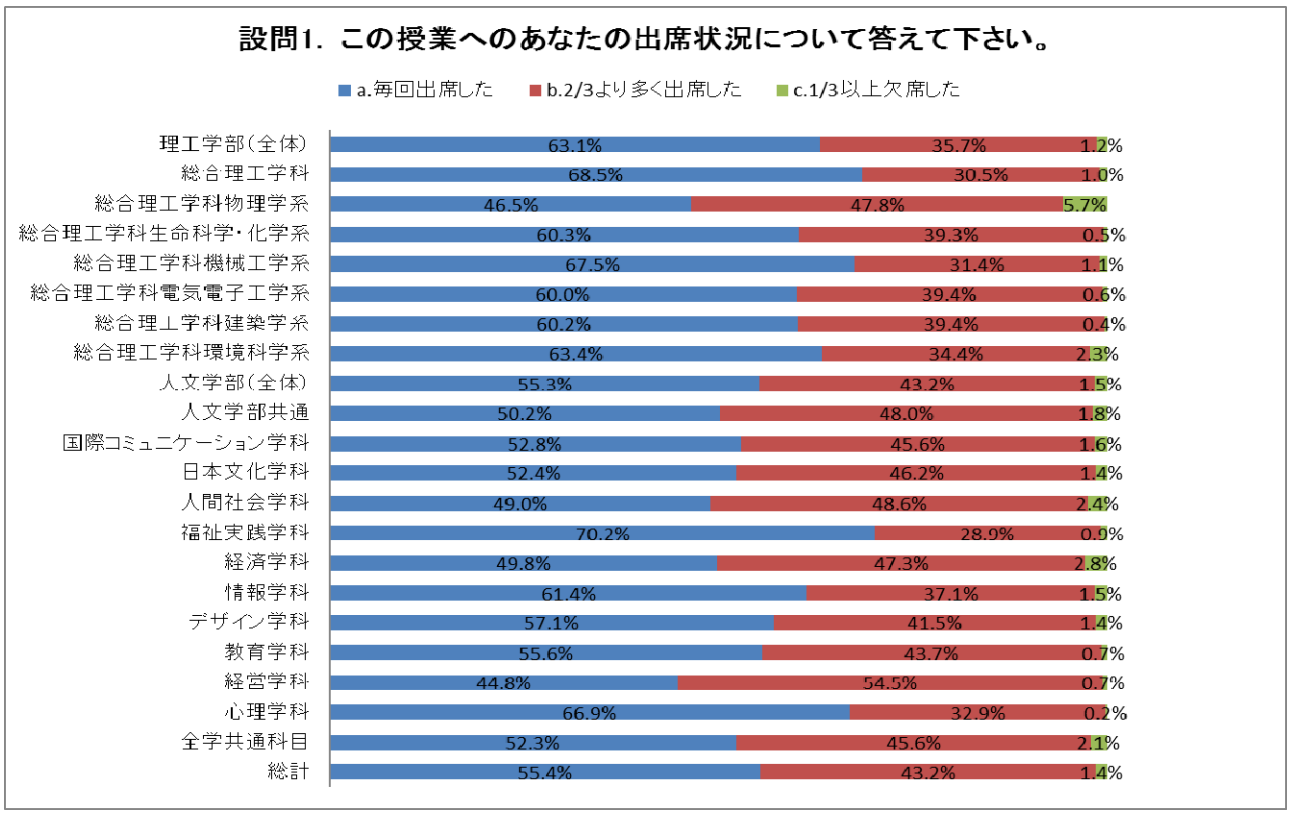
設問6. あなたは1回あたりの授業に対して、予習・復習をどの程度しましたか？

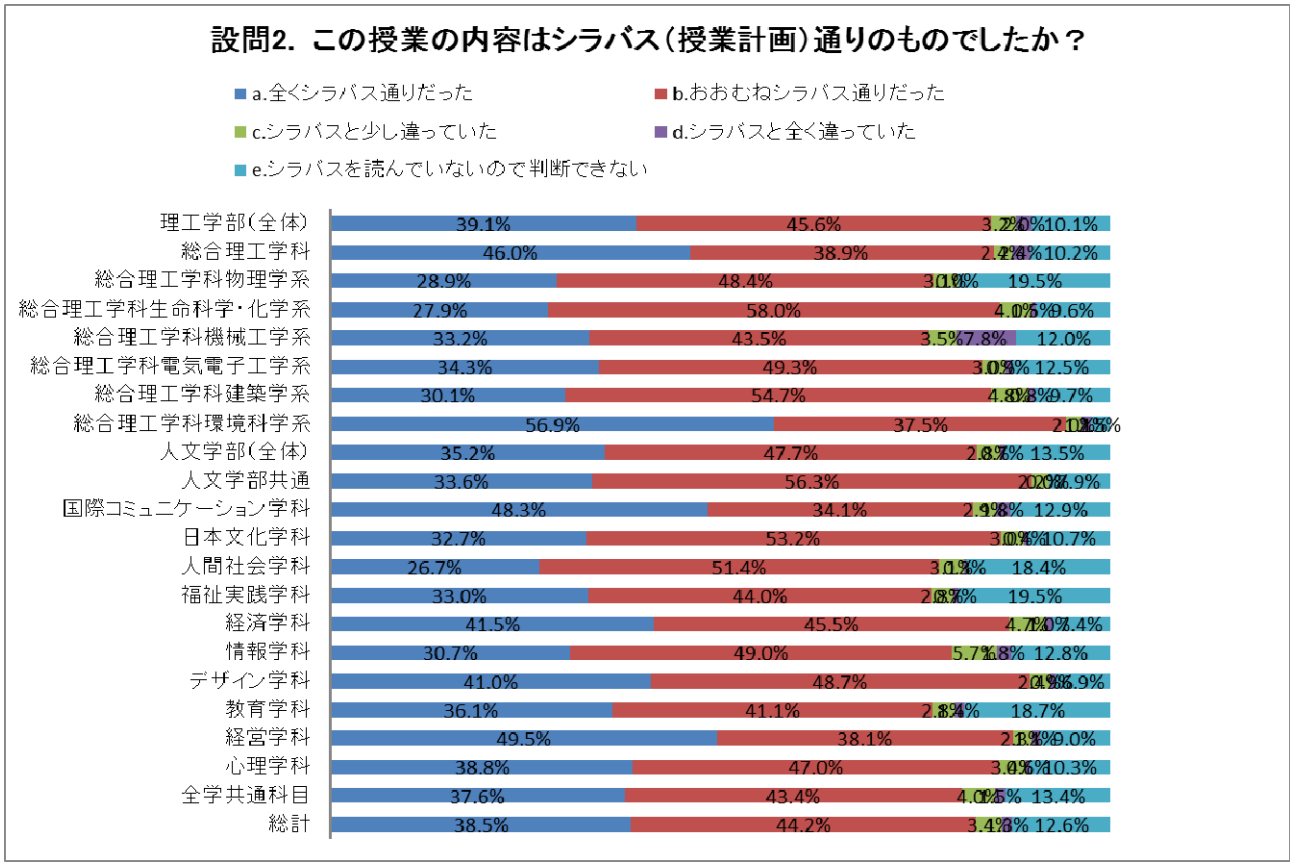


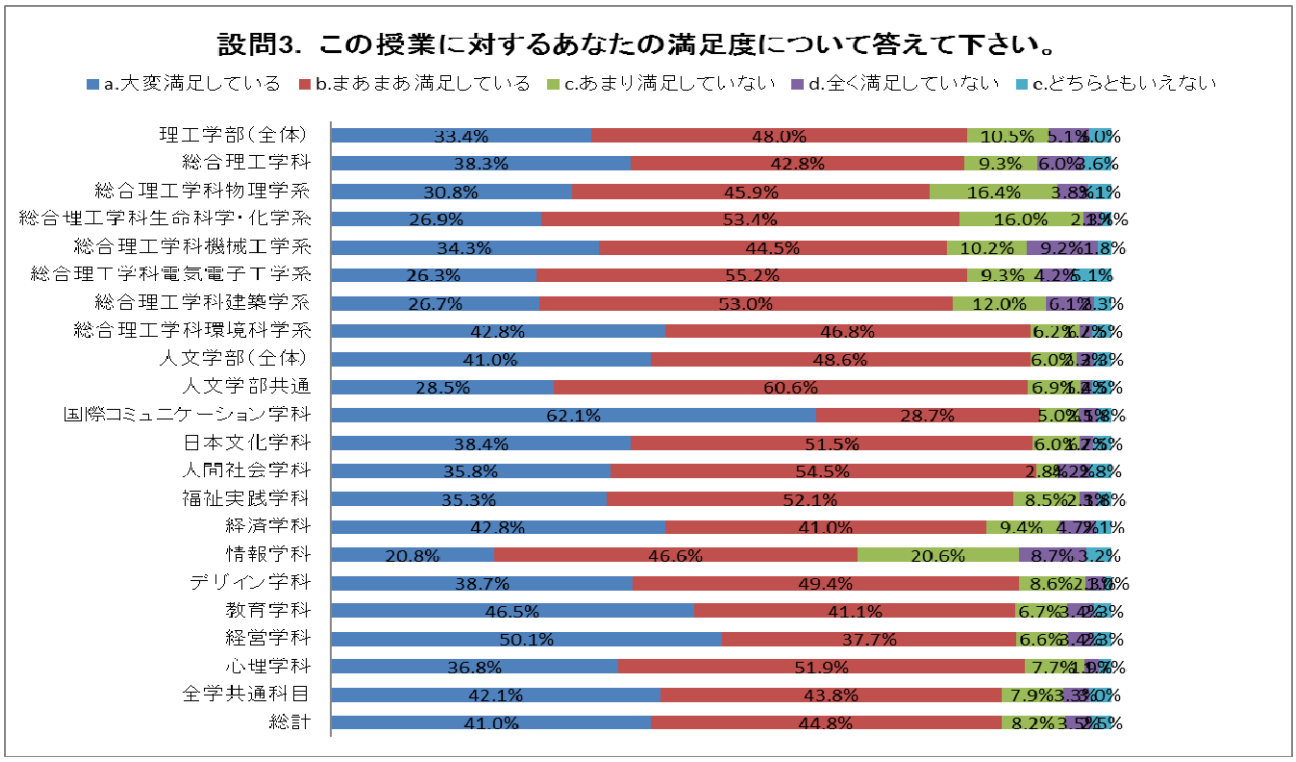
設問7. あなたはこの授業がよりよいものであるためには、どのような授業であったらよいと思いますか？

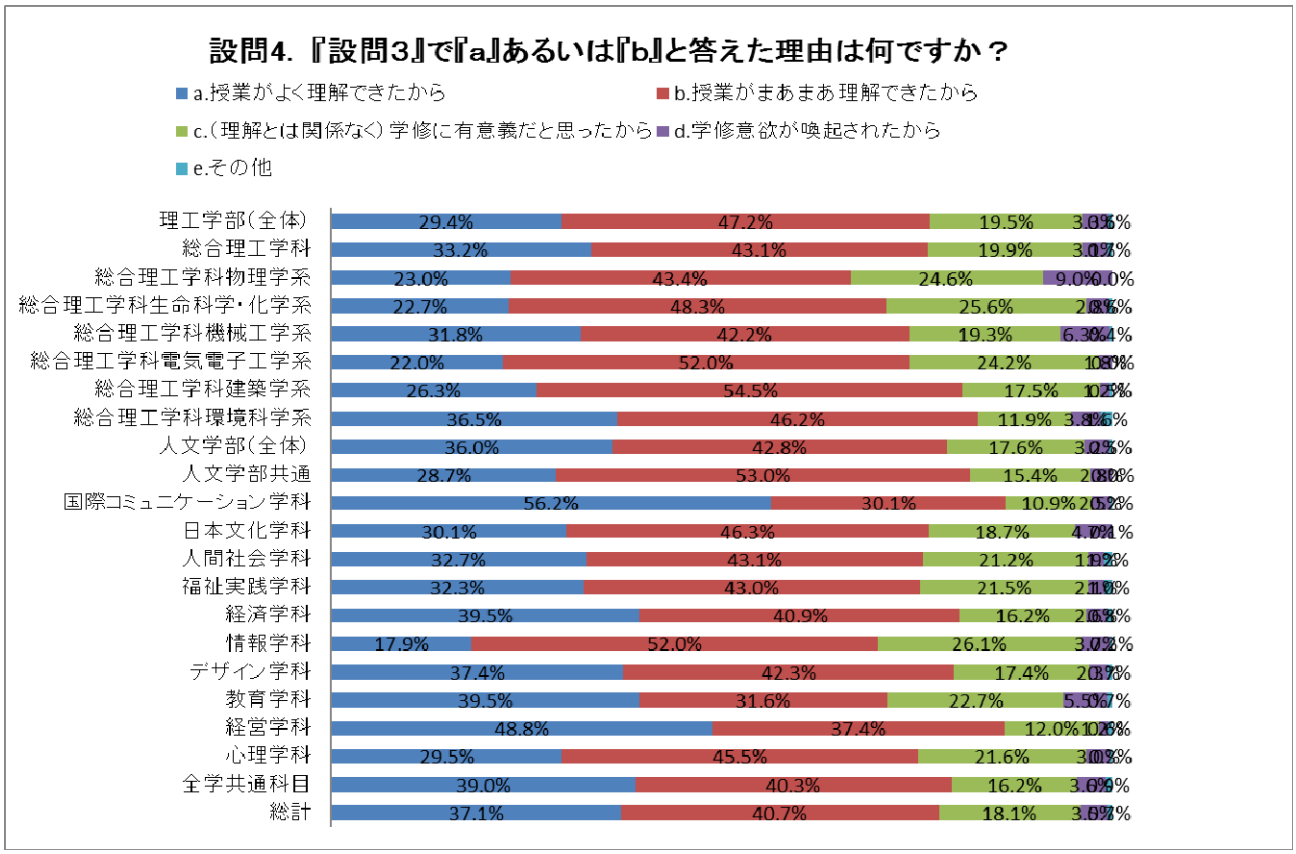


３）後期集計結果

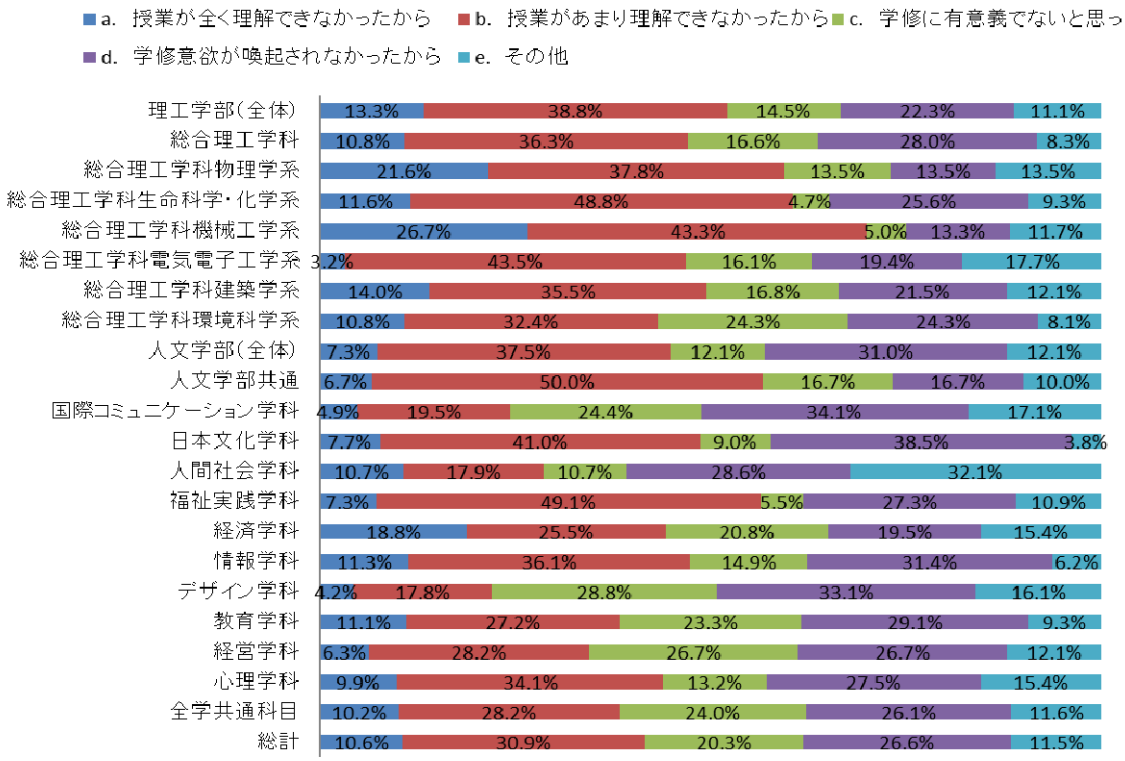

設問1. この授業へのあなたの出席状況について答えて下さい。
a.毎回出席した
b.2/3より多く出席した
c.1/3以上欠席した
理工学部(全体) 63.1% 35.7% 1.2%
総合理工学科 68.5% 30.5% 1.0%
総合理工学科物理学系 46.5% 47.8% 5.7%
総合理工学科生命科学・化学系 60.3% 39.3% 0.5%
総合理工学科機械工学系 67.5% 31.4% 1.1%
総合理工学科電気電子工学系 60.0% 39.4% 0.6%
総合理工学科建築学系 60.2% 39.4% 0.4%
総合理工学科環境科学系 63.4% 34.4% 2.3%
人文学部(全体) 55.3% 43.2% 1.5%
人文学部共通 50.2% 48.0% 1.8%
国際コミュニケーション学科 52.8% 45.6% 1.6%
日本文化学科 52.4% 46.2% 1.4%
人間社会学科 49.0% 48.6% 2.4%
福祉実践学科 70.2% 28.9% 0.9%
経済学科 49.8% 47.3% 2.8%
情報学科 61.4% 37.1% 1.5%
デザイン学科 57.1% 41.5% 1.4%
教育学科 55.6% 43.7% 0.7%
経営学科 44.8% 54.5% 0.7%
心理学科 66.9% 32.9% 0.2%
全学共通科目 52.3% 45.6% 2.1%
総計 55.4% 43.2% 1.4%


設問2. この授業の内容はシラバス(授業計画)通りのものでしたか？
a.全くシラバス通りだった
b.おおむねシラバス通りだった
c.シラバスと少し違っていた
d.シラバスと全く違っていた
e.シラバスを読んでいないので判断できない
理工学部(全体) 39.1% 45.6% 10.1%
総合理工学科 46.0% 38.9% 10.2%
総合理工学科物理学系 28.9% 48.4% 19.5%
総合理工学科生命科学・化学系 27.9% 58.0%
総合理工学科機械工学系 33.2% 43.5% 7.8% 12.0%
総合理工学科電気電子工学系 34.3% 49.3% 12.5%
総合理工学科建築学系 30.1% 54.7%
総合理工学科環境科学系 56.9% 37.5%
人文学部(全体) 35.2% 47.7% 13.5%
人文学部共通 33.6% 56.3%
国際コミュニケーション学科 48.3% 34.1% 12.9%
日本文化学科 32.7% 53.2%
人間社会学科 26.7% 51.4% 18.4%
福祉実践学科 33.0% 44.0% 19.5%
経済学科 41.5% 45.5%
情報学科 30.7% 49.0% 12.8%
デザイン学科 41.0% 48.7%
教育学科 36.1% 41.1% 18.7%
経営学科 49.5% 38.1%
心理学科 38.8% 47.0%
全学共通科目 37.6% 43.4% 13.4%
総計 38.5% 44.2% 12.6%

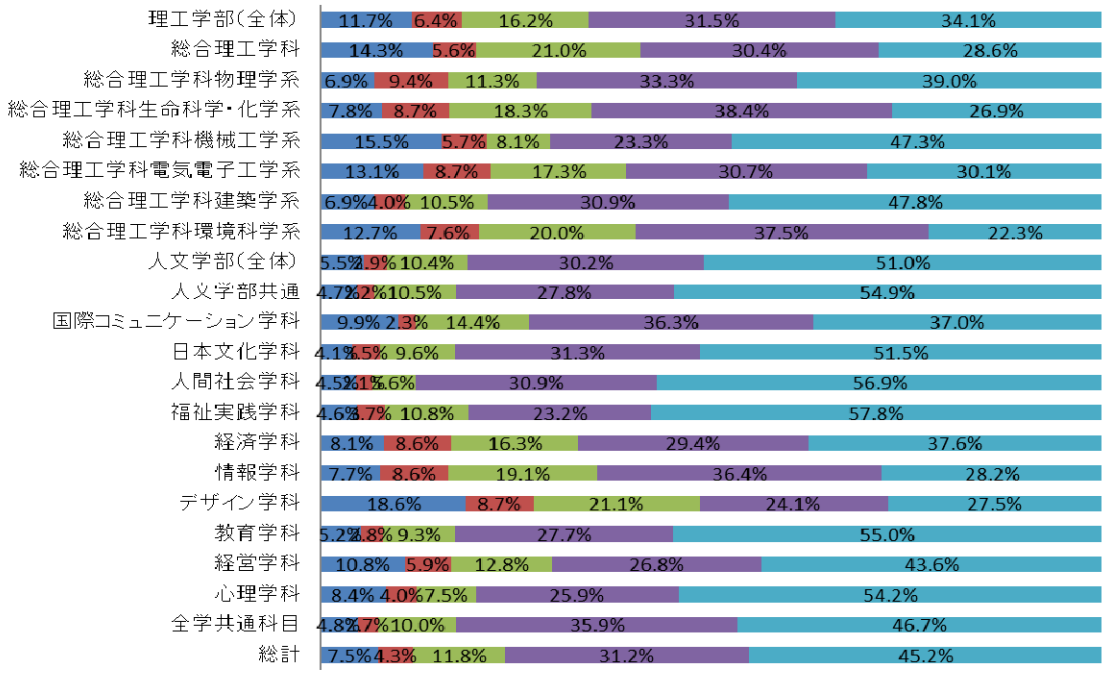

設問3. この授業に対するあなたの満足度について答えて下さい。
a.大変満足している
b.まあまあ満足している
c.あまり満足していない
d.全く満足していない
e.どちらともいえない
理工学部(全体) 33.4% 48.0% 10.5% 5.1% 4.0%
総合理工学科 38.3% 42.8% 9.3% 6.0% 3.6%
総合理工学科物理学系 30.8% 45.9% 16.4% 3.8% 3.1%
総合理工学科生命科学・化学系 26.9% 53.4% 16.0% 2.1% 1.6%
総合理工学科機械工学系 34.3% 44.5% 10.2% 9.2% 1.8%
総合理工学科電気電子工学系 26.3% 55.2% 9.3% 4.2% 5.1%
総合理工学科建築学系 26.7% 53.0% 12.0% 6.1% 2.3%
総合理工学科環境科学系 42.8% 46.8% 6.2% 2.2% 2.0%
人文学部(全体) 41.0% 48.6% 6.0% 2.2% 2.2%
人文学部共通 28.5% 60.6% 6.9% 2.4% 1.5%
国際コミュニケーション学科 62.1% 28.7% 5.0% 1.5% 2.8%
日本文化学科 38.4% 51.5% 6.0% 2.2% 2.0%
人間社会学科 35.8% 54.5% 2.8% 2.2% 4.8%
福祉実践学科 35.3% 52.1% 8.5% 2.1% 2.8%
経済学科 42.8% 41.0% 9.4% 4.7% 2.1%
情報学科 20.8% 46.6% 20.6% 8.7% 3.2%
デザイン学科 38.7% 49.4% 8.6% 2.1% 1.1%
教育学科 46.5% 41.1% 6.7% 3.4% 2.3%
経営学科 50.1% 37.7% 6.6% 3.4% 2.3%
心理学科 36.8% 51.9% 7.7% 1.9% 1.7%
全学共通科目 42.1% 43.8% 7.9% 3.3% 2.0%
総計 41.0% 44.8% 8.2% 3.5% 2.5%


設問4. 『設問3』で『a』あるいは『b』と答えた理由は何ですか？
a.授業がよく理解できたから
b.授業がまあまあ理解できたから
c.(理解とは関係なく)学修に有意義だと思ったから
d.学修意欲が喚起されたから
e.その他
理工学部(全体) 29.4% 47.2% 19.5% 3.0% 0.9%
総合理工学科 33.2% 43.1% 19.9% 3.0% 0.7%
総合理工学科物理学系 23.0% 43.4% 24.6% 9.0% 0.0%
総合理工学科生命科学・化学系 22.7% 48.3% 25.6% 2.8% 0.6%
総合理工学科機械工学系 31.8% 42.2% 19.3% 6.3% 0.4%
総合理工学科電気電子工学系 22.0% 52.0% 24.2% 1.8% 0.0%
総合理工学科建築学系 26.3% 54.5% 17.5% 1.2% 0.4%
総合理工学科環境科学系 36.5% 46.2% 11.9% 3.8% 1.6%
人文学部(全体) 36.0% 42.8% 17.6% 3.0% 0.5%
人文学部共通 28.7% 53.0% 15.4% 2.0% 0.8%
国際コミュニケーション学科 56.2% 30.1% 10.9% 2.0% 0.9%
日本文化学科 30.1% 46.3% 18.7% 4.7% 0.1%
人間社会学科 32.7% 43.1% 21.2% 1.9% 0.2%
福祉実践学科 32.3% 43.0% 21.5% 2.1% 1.0%
経済学科 39.5% 40.9% 16.2% 2.6% 0.8%
情報学科 17.9% 52.0% 26.1% 3.0% 0.2%
デザイン学科 37.4% 42.3% 17.4% 2.0% 0.9%
教育学科 39.5% 31.6% 22.7% 5.5% 0.7%
経営学科 48.8% 37.4% 12.0% 1.2% 0.6%
心理学科 29.5% 45.5% 21.6% 3.0% 0.3%
全学共通科目 39.0% 40.3% 16.2% 3.6% 0.9%
総計 37.1% 40.7% 18.1% 3.6% 0.2%

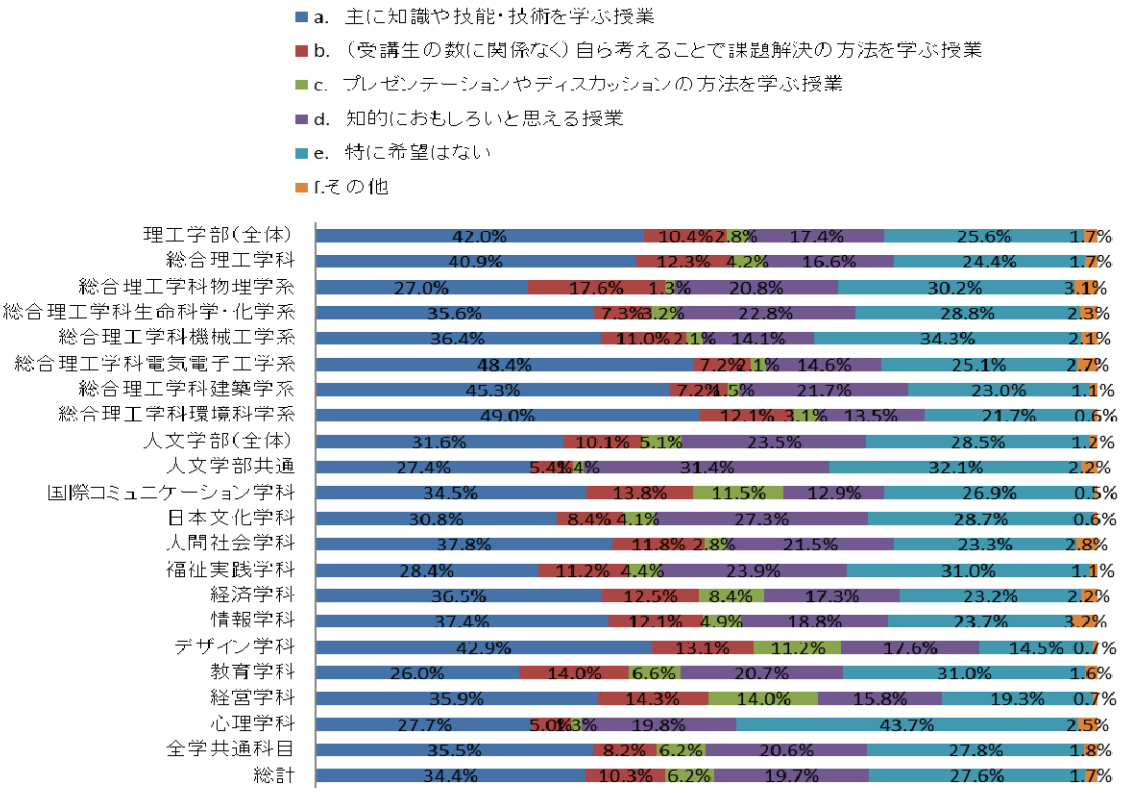
設問5. 『設問3』で『c』『d』あるいは『e』と答えた理由は何ですか？



設問6. あなたは1回あたりの授業に対して、予習・復習をどの程度しましたか？



設問7. あなたはこの授業がよりよいものであるためには、どのような授業であったらよいと思いますか？



３．2019 年度 授業アンケート結果の概要

１）全学の総評

２）理工学部
①学部長による総評
②総合理工学科　物理学系
③総合理工学科　生命科学・化学系
④総合理工学科　機械工学系
⑤総合理工学科　電気電子工学系
⑥総合理工学科　建築学系
⑦総合理工学科　環境・生態学系

３）人文学部
①学部長による総評
②国際コミュニケーション学科
③日本文化学科
④人間社会学科
⑤福祉実践学科

４）経済学部
①学部長による総評
②経済学科

５）情報学部
①学部長による総評

６）教育学部
①学部長による総評

７）経営学部
①学部長による総評

８）デザイン学部
①学部長による総評

９）心理学部
①学部長による総評

１０)全学共通教育委員会
①全学共通教育　委員長による総評

2019年度　学生による授業アンケート結果の概要

１）　全学の総評（前期）

以下、2019 年度前期に実施した授業アンケートの全学的な結果ついて総評する。なお今年度の授業アンケートは、2018 年度に設問を大幅にリニューアルしてから二度目の実施となるため、昨年度の結果との比較によって経年的な変化や傾向を測定する最初の機会となる。

（１）　設問１は受講生の出席状況を尋ねているが、その趣旨は 1/3 以上欠席している受講生が多数の場合、アンケートそのものが意味をなさないことを示すためである。結果的に今年度前期の受講状況はすべての学科（学系ならびに全学共通科目及び人文学部共通科目も含む、以下同じ）で、回答した受講生の約 98%以上が 2/3 以上出席していた。ちなみに大学全体の平均値では、「毎回出席した」が 58.1%（昨年度前期 61.5%、以下同じ）、「2/3 より多く出席した」が 40.4%（36.8%）、「2/3 以　上欠席した」が 1.5%（1.7%）であり、昨年度とほぼ同じ結果であった。
学科別に見た場合、特に「毎回出席した」の回答率が高かったのは総合理工学科の 67.6%(75.2%)、心理学科の 68.6%(71.1%)、福祉実践学科の 66.6%(74.4%) 並びにデザイン学科の 65.4%(65.8%)。逆に「毎回出席した」の回答率が比較的低かったのは、人文学部共通の 43.3%（41.1%）、経営学科の 44.3%(49.6%) だった。こうした結果から必ずしも明確な傾向を読み取ることはできないが、学修目標が受講生にとって比較的明らかな分野の場合「毎回出席した」の回答率が高いと言えるかもしれない。これは昨年度と同じ傾向である。

（２）　設問２は授業がシラバスに沿って行われたかどうかについて尋ねている。大学全体の平均値を見ると、「全くシラバス通りだった」が 38.2%（34.3%）、「おおむねシラバス通りだった」が 44.7%（43.9%）、「シラバスと少し違っていた」が 3.2%（3.4%）、「シラバスと全く違っていた」が 1.1%（1.2%）、「シラバスを読んでいないので判断できない」が 12.7%（17.2%）だった。この結果は多くの授業がほぼシラバスに沿って展開されていることを示している。また、「シラバスを読んでいないので判断できない」が昨年度より５ポイント以上低くなっていることは、学生のシラバス活用が若干高まっていることを示していると考えられる。
学科別に見ると、いずれの学科もほぼ同じ傾向であることがわかるが、昨年度と同様に教育学科の「シラバスを読んでいないので判断できない」が 22.3%(24.9%)、福祉実践学科が 17.2%(20.5%) と比較的高い数値になっている。これは学修すべき科目が予め比較的多く定められている学科の特性を反映しているものと解釈できる。

（３）設問３は授業に対する満足度を尋ねている。大学全体の平均値では、「大変満足している」が 38.8%（38.8%）、「まあまあ満足している」が 45.5%（45.1%）であり、「あまり満足していない」　の 8.9%（9.3%）と「全く満足していない」の 3.8%（3.8%）の合計を大きく上回っている。この結果が示す限り、昨年度と同様に学生の満足度はそれなりに高いと言える。
学科別に見ると、特に「大変満足している」の回答率が高いのは国際コミュニケーション学科の 49.3%（47.8%）、建築学系の 45.3%(35.8%)、教育学科の 45.2%（47.9%）、デザイン学科の 45.1%（47.2%）並びに経営学科の 44.2%（37.4%）だった。その他の学科もほぼすべて、「大変満足している」と「まあまあ満足している」の合計値が 80%を大きく超えていることから、学生の満足度は比較的高いと解釈できる。

（４）設問４は、設問３で「大変満足している」或いは「まあまあ満足している」と回答した受講生にその理由を尋ねている。大学全体の平均値では「授業がまあまあ理解できたから」が 42.0%（41.4%）で最も高く、次いで「授業がよく理解できたから」が 35.0%（34.8%）だった。それに比べて「（理解とは関係なく）学習に有意義だと思ったから」は 18.0%（18.0%）と比較的低く、「学修意欲が喚起されたから」は 4.0%（4.7%）と極めて低い回答率だった。この結果も昨年度と同じ傾向を示しており、学生の授業に対する満足度はその理解度に深く関係していることが認められた。
学科別でも大学全体の平均値とほぼ同じ傾向であり、「（理解とは関係なく）学修に有意義だと

思ったから」の回答率が二番目に多かった学科は物理学系の 28.1%（26.3%）だけだった。

（５）設問５は、設問３で「あまり満足していない」、「全く満足していない」或いは「どちらともいえない」を選択した受講生にその理由を尋ねている。大学全体の平均値では、「授業があまり理解できなかったから」が 32.7%（35.0%）と最も高く、次いで「学修意欲が喚起されなかったから」が 26.3%（25.8%）、「学修に有意義でないと思ったから」が 21.5%（18.2%）、「その他」が 10.4%（10.3%）、最後に「授業が全く理解できなかったから」が 9.1%（10.7%）だった。昨年度と比べると、「その他」と「授業が全く理解できなかったから」の順序が入れ替わっていること以外は、数値も含めてほぼ同じ回答結果となっている。この結果から、授業に対する満足度が低いことには様々な理由があることが窺える。
学科別では、特に「授業があまり理解できなかったから」が高い回答率だったのは福祉実践学科の 53.3%（45.3%）と日本文化学科の 51.1%（37.0%）で、昨年度と比べても回答率がかなり高くなっている。また、「学修意欲が喚起されなかったから」が最も高い回答率になっているのは心理学科の 34.6%（25.0%）、教育学科の 30.3%（32.1%）並びにデザイン学科の 31.0%（29.3%）で、これは昨年度と同様の傾向である。これは、満足度が低い学生の数そのものはそれほど多くないと思われるが、教育目標が比較的明確に定まっている分野に学修意欲を失いがちな学生が少数ながら存在することを示しているとも解釈できる。いずれにしても、授業に対する満足度を上げるには様々な工夫が求められていると言える。

（６）設問６は受講生が予習・復習にかける時間について尋ねている。大学全体の平均値では「しなかった」が 48.4%（50.3%%）で最も高い回答率だった。次いで「30 分程度」が 31.4%（30.0%）、「60 分程度」が 10.6%（10.1%）、「90 分以上」が 5.9%（6.2%）と続き、最も回答率が低かったのが「90 分程度」の 3.8%（3.4%）だった。
学科別の傾向もほぼ同様であるが、生命科学・化学系の場合は「しなかった」が 17.1%（29.8%）と三番目の低い回答率だった。また電気電子工学系と環境科学系の場合も「しなかった」がいずれも 29.6%（28.5%及び 21.7%）と若干低く、二番目の回答率だった。
逆に「90 分以上」が比較的高い回答率だったのはデザイン学科の 18.6%（21.1%）、電気電子工学系の 18.3%（17.2%）並びに生命科学・化学系の 16.0%（8.1%）だった。これは学修分野の違いによるものなのかもしれないが、工夫や取り組み次第では予習・復習の時間を増加させることが可能であることを示唆している。
なお、以上の結果は昨年度とほぼ同様の傾向を示している。

（７）設問７はどのような授業を望むかについて二つまで回答可で尋ねている。大学全体では回答率の高い順に「主に知識や技能・技術を学ぶ授業」の 33.3%（30.1%）、「特に希望はない」の 26.0%（29.3%）、「知的におもしろいと思える授業」の 20.8%（20.9%）、「（受講生の数に関係なく）自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業」の 11.2%（10.6%）と続き、最も低いのは「プレゼンテーションやディスカッションの方法を学ぶ授業」の 6.9%（7.0%）だった。この結果は昨年度とほぼ同じ結果となっている。
学科別に見てもほぼ同じ傾向を示しているが、いくつかの学科では昨年度と同様に「特に希望はない」が最も高い回答率となっている。その内訳は心理学科の 44.4%（44.8%）、福祉実践学科の 35.9%（33.9%）並びに教育学科の 27.5%（31.3%）だった。こうした傾向は、これらの学科の教育目標が比較的明確に定まっていることに関わっていると解釈できる。
以上の結果から、学生の多くは知識や技能・技術を修得したいと考えている一方で、知的満足度や課題解決能力などを求める学生も一定数いることがわかる。また、「特に希望はない」が二番目に高い回答率であることを見ると、現行の授業でよいと思っている学生も比較的多く存在することがわかる。とは言いながらも、本設問に対する回答の選択が他の設問と比べると比較的分散していることから、学生が授業に求めているものは多岐にわたっていると理解することもできる。

以上

全学 FD 委員長　服部　裕

１）全学の総評（後期）

2019 年度後期の授業アンケート結果は昨年度と同様、ほぼすべての設問で前期と同じ傾向を示している。これは学科ごとの結果に関しても同様である。以上の結果が示す通り、本学が特に取り組まなければならない課題は、昨年度と同様に予習・復習の時間を増やすことである。そのためには、学生の自学自習をなお一層促すような授業運営が求められる。

以上

全学 FD 委員長　服部　裕

２）理工学部

理工学部長による総評

授業アンケート回答結果について，理工学部全体の状況について，以下、設問毎に全学との比較などを行う。

授業出席（設問 1）について,「毎回出席した」が前期 64.2％（前年 70.9%）, 後期 63.1％（前年 61.9%）となり，割合は全学総計 58.1%（前期）と比較し，わずかに高めの値となった。授業内容とシラバスの合致（設問 2）について，シラバス通り（全く＋概ね）は前期 85.1%，84.7%となった。概ねシラバスに沿って行われたといえる。授業の満足度（設問 3）について，満足（大変＋まあまあ）は前期 82.6%，後期 81.4%となり，こちらも全学の 84.3%と比べわずかに低い状況であった。多くの学生は概ね授業内容には満足していたと考えられる。その理由（設問 4）として，理解できた（よく＋まあまあ）について前期 76%，後期 76.6%であった。不満足の理由は，理解できなかったが前期 45.2%，後期 52.1%であった。不満足（設問 3）の割合は低いものの、そのうち理解出来ないと回答した学生が半数となるため、全体的な理解度向上を進めるため，各担当教員で個別指導なども含め工夫することが求められる。1 回あたりの予習・復習（設問 6）について，60 分以上行った学生は前期 29.2%，後期 34.3%となり，全学総計に比べると多い結果となった。理工学部では実験・演習レポートなど課題が多いことが影響していると考えられる。「しなかった」は，ほぼ昨年同等の前期 40.0%，後期 34.1%となり，自己学習の必要性の啓発を，これまで以上に進める必要がある。どのような授業が望ましいか（設問 7）については，最も多い回答は，技能・技術が前期 41.0%，後期 42.0%となった。理系の学生の傾向であり、要望に添った教育が概ね実施されているといえる。理工学部独自設問，授業教材（設問 9）については，理解できた（よく＋まあまあ）は，前期 76.4%，74.4%となった。概ね教材の質も保たれているといえる。

自由記述については具体個別に様々な意見が書かれており，担当教員のみならず，学系において情報共有し、授業改善を行うことが重要である。また，アンケート回答率が前期 31.8%，後期 30.0%と例年同様低く，各教員の取り組みでも回答率を引き上げることはできなかったといえる。各科目の更なる質的向上を全教員で目指したい。

（理工学部長　宮脇　健太郎）

３）人文学部

① 人文学部長による総評

設問 1.「授業への出席状況」については、毎回出席と 2/3 以上出席を合わせると、前期 98.3%、後期 98.5%でほぼ健全なレベルであるといえる。

設問 2.「シラバスが守られているか」に関しては、a.まったくシラバス通り、b.おおむねシラバス通りを合計すると前期 88.5%、後期 86.5%と８割以上がシラバス通りの授業ができていると学生が評価している。これに関してもおおむね特段の問題はないと思われる。

設問 3.「授業満足度」については、a.大変満足と b.まあまあ満足を合計すると前期 85.8%、後期 89.6%なっており満足度水準はかなり高くなっている。中でも「満足している」割合が国際コミュニケーションでは平均 50%以上に達している。これは、全学的にみてもかなりの高さであるといえる。

設問 4.「授業が満足な理由」については満足な理由が理解できたという人が前期 78.0%、後期 77.8%で約８割近い学生がわかりやすさを授業が満足な理由に挙げている。これは、各先生が授業の内容や教授方法を吟味し工夫してきた結果がこの数値に表れていると思われる。

設問 5「授業が不満足な理由」については学業に有意義ではないと思ったという理由が半数近くあり、学習意欲が喚起されなかったという理由が３割近くある。学業にプラスには働かないということと興味関心を持つに至らなかったということであろう。満足度が高い中で 15%程度の学生が不満を持ち、それらの学生の多くが興味関心を持てなかったということなので、それらの学生に対する興味を持たせる授業の工夫が必要であると思われる。

設問 6「1 回あたりの授業に対して、予習復習をどの程度したか」に関しては、全くしなかった学生が 5 割近くおり非常に重大な問題といえる。授業中に、教員が事前学習と事後の学習課題を適切に与える必要があると思われる。

設問 7「授業がより良いものになるためには、どのようなことが必要か。」a.主に知識や技能・技術を学ぶ授業。e.特に希望なしが共に 3 割近くある。このことは、資格取得につながる授業か就職後実践的に役立つ授業を望んでいることを示している。これらの学生の志向性は専門学校でも果たされるものである。大学である意味は、価値観や人生哲学につながる学問を成就させることにある。知識・技能・技術に偏重することなく、哲学等の基礎的な学問領域を充実させる必要があると思われる。

（人文学部長　馬場　康彦）

② 人文学部　国際コミュニケーション学科による総評

2019 年のアンケートでは、いくつかの興味深い結果が得られた。まず、出席状況については、前期は 97.6%、後期も 98.4%の回答者が、「毎回出席した」または「2/3 より多く出席した」と回答し、また、前期 84.8%、後期 90.8%の回答者が授業内容に対して「大変満足している」または「まあまあ満足している」と答えている。この結果は、各教員の努力の成果と言える。

しかしながら、1 回にあたりの授業に充てる予習・復習の時間は、「90 分以上」または「90 分程度」と回答した学生は、前期は 11.513.6%、そして、後期も 12.216.3%にすぎず、前期 39.632.1%、後期 37.035.0%の回答者が全く予習・復習しなかったと回答した。これは数年間にわたって見られる傾向であり、学生たちの学びをより実りあるものにするために改善が急務である。

その他、興味深い結果としては、設問７の「あなたはこの授業がより良いものであるためにはどのような授業であったら良いと思いますか」という質問では、前期、後期とも「主に知識や技能・技術を学ぶ授業」という回答が最も多い点が挙げられる。知識・技能・技術を学びたいと考えているにも関わらず、予習・復習には時間を費やさず、授業内のみで知識・技能・技術の獲得を完遂しようとしているということだろうか。こうした考え方はあまりにも無理があるため、今後は、いかに予習・復習を授業外で行うよう促していくのかがカギとなるであろう。また、設問４では、前・後期とも「学習意欲が喚起されないから」授業に満足できないと回答する学生が多いことも興味深く感じた。いかに学生の学習意欲を換気・強化できるか、この点を考え教員は授業内容を検討・準備していく必要があるであろう。

（国際コミュニケーション学科主任　深田　芳史）

③ 人文学部　日本文化学科による総評

アンケートの結果は、従来の結果と傾向は変わらず、大変良好である。授業内容に満足、おおむね満足を合わせて 90%弱となっている。これまでの各教員の努力が実っていることが確認できた。これからも学生との対話、アクティブラーニングの増加などをはじめとする改善を続けていけば、2020 年度の満足度がさらに高まるであろう。

学生が考える改善点としては「知的に面白いと思える授業」が 30%弱、「主に知識や技能を学ぶ授業」も 30%弱であった。実際は講義中心のものも学生のアクティブな参加を必要しているものも多く提供されているので、全体としては学生を満足させられると考えられる。

毎回出席した学生は５２％と少なめであったが、3 分の 1 以上の欠席は 1.4%ほどしかなく、この点でも評価できる。

シラバスを読んでいない学生は 10%程度いたことは問題視されるべきである。今後はガイダンスにおいて周知し、また授業が始まったあとでも、各担当教員がシラバスを読んで授業に臨むように指導する必要があろう。ただし、85%以上がシラバス通り、あるいはおおむねシラバス通りと回答していたので、シラバスとの乖離は限定的であるという望ましい状況となっている。

学科の偏差値が上昇し続けており、合格者の手続き率も上昇していることから、学生の知的好奇心が高くなっていることがうかがえる。今後は学生の様子を注意深くみながら、より水準の高い授業を提供する必要が出てきている。

（日本文化学科主任　内海　敦子）

④ 人文学部　人間社会学科による総評

設問１「授業内容の出席状況」については、「1/3 以上欠席した」と回答した学生は、前期 2.2%、後期 2.4%で、アンケートに回答した学生に限れば、おおむね出席状況は良い。設問３「授業の満足度」では前期 85.3%、後期 90.3%が「満足」しており、その理由は前期 70.2%、後期 75.8%が「理解できた」からとしている。興味深いのは、授業に満足した理由として「(理解とは関係なく) 学修に有意義だと思ったから」とした者が前期 24.3%で全所属中最も高く（平均 18.0%）、後期も 21.2%（平均 18.1%）と高い水準を示していることである。一方、「満足していない（前期 12.8%、後期 7.0%)」者は、前期 38.3%、後期 28.6%が「理解できなかった」ことを理由に挙げている。このことから、授業が理解できたことが満足度につながっていることが示唆されるが、全体平均（前期 41.8%、後期 41.5%）から比べると理解出来なかったことを理由とする割合は低い。学科として特徴的なのは「満足していない」理由として「その他」を選択している者が前期 21.3%、後期 32.1%〈全体平均（前期 10.4%、後期 11.5%)〉と際立って高いことである。設問６「授業の予習・復習」については、「予習・復習をまったくしなかった」割合が、前期 58.0%（H30 年度 63.8%)、後期 56.9%（同 55.7%）と変わらず高い。教員学生それぞれ、学修の理解を深める努力をする必要があるが、学科の特性をいかした授業展開とその深化を、アンケートの自由記述の分析も併せて行う必要があるだろう。

（人間社会学科主任　鵜沢　由美子）

⑤ 人文学部　福祉実践学科による総評

設問 1.「授業への出席状況」「授業の出席状況」については、前期は 98.8%、後期も 99. 1％の回答者が、「毎回出席した」または「2/3 より多く出席した」と回答し、他の学科と比較しても高い傾向にある。本学科の人数が比較的少人数であること、また教員がリアクションペーパーなどの活用を行っているためと考えられる。

設問 2.「シラバスが守られているか」に関しては、「まったくシラバス通り」「.おおむねシラバス通り」を合計すると前期 78.4%、後期 77.1％と８割近くがシラバス通りの授業ができていると学生が評価している。一方で、「シラバスを読んでいないので判断できない」と回答した学生が前期 17.2％、後期 19.5％いる・

設問 3.「授業満足度」は、前期 85.9％、後期 87.4%の回答者が授業内容に対して「大変満足している」または「まあまあ満足している」と答えている。設問 4.「授業が満足な理由」としては、「授業の内容の理解」については、「よく理解できた」「まあまあ理解できた」を合わせて、前期が 77.5%、後期 75.3％である。一方、「満足していない（前期 9.7%、後期 10.8％）」と回答した者では、設問５「満足していない」「どちらともいえない」の理由として、前期 57.8％、後期 56.4％が「授業が理解できなかった」こと、前期 24.4％、後期 27.3％が「学修意欲が喚起されなかったから」を挙げている。

設問 6「1 回あたりの授業に対して、予習復習をどの程度したか」は、「しなかった」が前期 55.9%、後期 57.8%となっている。

設問 7「授業がより良いものになるためには、どのようなことが必要か。」という問いに対しては、「a.主に知識や技能・技術を学ぶ授業が前期 26.3%、後期 28.4%、「d.　知的におもしろいと思える授業」が前期 20.3%、後期 23.9%となっている。一方で、「e.　特に希望はない」と回答したものが、前期 35.9%、後期 31.0%となっている。これは、すでに満足のいく授業がなされているため希望がないと回答したとも考えられるが、学習への意欲が低いために希望がないとも、両方の可能性が考えられる。

以上のように、福祉実践学科の学生は、講義全体への満足度は高い。しかしながら、「予習復習時間」を「しなかった」と回答した学生が 5 割以上存在する。シラバスに予習復習の時間や内容の記載を行うようになったが、シラバスを読んでいない学生も 2 割近くいる。今後、学生の学習に取り組む姿勢を高めるために、シラバスを読み、それに基づいて予習復習を習慣化させる取り組みが必要と考える。

以上

（福祉実践学科主任　山井　理恵）

４）経済学部

① 経済学部長による総評

経済学科全体の集計結果をみると、回答率がかなり低い点が懸念される。ちなみに、経済学科は前期 14.7%、後期 12.7%となっており、全学のそれは前期 33.9%、後期 27.9%であった。回答率を上げるために各教員が色々と工夫を凝らしているが、妙案はない。アンケート回答の誘因付与が課題であろう。

「授業の満足度」に関しては、前・後期とも 80%強が満足しており、学科独自のアンケートの質問項目である「授業の集中度」に関してもほぼ同様の傾向を示している。全体としては、学生は授業に集中し、教員も熱心に授業に取り組んでいる、ということがこの集計結果からみてとれる。ただし、予習・復習をしなかった学生が、全学の集計結果よりは比率が低いものの、前・後期とも約 40%も存在していたのは残念である。

なお、教員個々の自己評価結果をみると、各教員とも授業改善アンケートの集計結果を真摯に分析し、これを自らの授業改善に役立てていこうとする姿がみてとれた。今後、さらなる授業改善を行なっていくためには、教室が満席状態のとき集中力に欠ける学生が出てくること、個人ワークやグループワーク中心の授業の場合、教員の授業管理に不満をもつ学生が出てくること等々を、どう改善していくかが課題となろう。

（経済学部長　坂本　秀夫）

５）情報学部

① 情報学部長による総評

アンケートの回答数(回答率)は，前期 1037(30.4%)，後期 596(19.3%)となっており，昨年度に比べて改善されてはいるが，十分な回答数はまだ得られていない。授業時間内でのアンケートの実施が教員に対して依頼されてはいるが，実験系の科目では授業時間内に回答させることが難しくなっている。授業時間外でのアンケート回答についての学生へのリマインドも行っているが，アンケートの回答率を上げるためには，何らかの改善策の検討が必要であるように思われる。

設問１「授業への出席状況」については，昨年度とほぼ同様な傾向であった。2/3 以上出席した学生は前期 98.5%，後期 98.2%であり，アンケートに回答した学生に限れば，良好な出席状況となっている。

設問２「授業内容とシラバスの整合性」については，昨年度と同様におおむね相違なかったという回答であったと見て取れる。ただし,「シラバスを読んでいない」との回答が，前期 9.4%，後期 12.8%となっており，改善すべき点であると考えられる。

設問３「授業の満足度」については,「大変満足」「まあまあ満足」とする評価の割合が大学全体と比べて低い結果となっており，授業改善に向けたさらなる努力が必要である。

設問４「授業満足度が高い理由」については，授業の理解度が満足度に大きく作用していることがわかる。「学習意欲が喚起されたから」を理由とする割合は，前期 5.2%，後期 3.7%と依然として低く，授業改善に当たって注意すべき点となっている。

設問５「授業満足度が低い理由」については，授業の理解度を理由とする割合が前期・後期ともに昨年度に比べて 10%ほど減少し，学修の意味や学習意欲を理由とする割合が増加している。授業の満足度を上げるためには，授業の理解度を高めるだけではなく，学修の意味付けを明確にすることや，学習意欲を高める工夫が必要となってきている。

設問６「授業の予習・復習」については,「３０分程度」「しなかった」を合わせて前期 72.7%，後期 64.6%となっており，学生が授業の予習・復習に充てる時間は昨年度と同様に少ない。学生は，学修の意味付けを明確にできていないことや，授業によって学ぶ意欲が高まることもほとんどないことから学修が受動的となっており，授業時間外の学習活動が改善されない要因となっているようにも考えられる。

設問７「よりよい授業形態」では,「主に知識や技能・技術を学ぶ授業」「知的に面白いと思える授業」を合わせて前期 54.8%，後期 56.2%となっているのに対して,「自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業」は前期 11.6%，後期 12.1%となっており，昨年度と同様な傾向であった。この結果が，従来の受動的な授業形態を情報学部の半数程度の学生が望んでいるのに対して，主体的に課題解決を考える能動的な授業形態を望んでいる情報学部の学生は一割程度であることを示唆するものであれば，授業の改善に取り組んではいるが，学生の学修に対する姿勢を変えるまでには至っていないようである。　学生の学修の質を高められるよう，今後も継続して授業改善に取り組みたい。

（情報学部長　福田　光一）

６）教育学部

① 教育学部長による総評

授業への出席状況を問う設問１では、教育学部の学生の毎回の出席率は、前期では 60.9%であったものが、後期では 55.6%に 5.3 ポイント低下している。昨年度の調査結果に比べ、前期、後期いずれも毎回の出席率が低下している。学修の基本は授業への出席・参加であることからすると、学生に対し、授業を 3 分の 2 以上出席すればよいという安易な気持ちを払拭させ、全 15 回の授業を受講することの重要性を今後とも喚起していく必要がある。

授業内容とシラバスとの関係を問う設問２では、教育学部の学生は、「全くシラバスどおり」ないし「おおむねシラバスどおり」と回答した者の割合が、前期で、74.5%、後期で、77.2%で、全学の平均（82.9%、82.7%）より低く、教授者側において授業実施においてシラバスに沿って授業を展開することの意義の一層の理解が求められる。なお、「シラバスを読んでいないので判断できない」とした学生が、前期で、22.8%、後期で、18.7%に上ることは、学生の授業への取組の意欲の乏しさを示すもので、今後、シラバスを活用して授業に臨む学修習慣と態度を身につけさせるよう指導する必要がある。

授業に対する満足度を尋ねる設問３では、教育学部の学生のうち、「大変満足している」、「まあまあ満足している」と回答したものが、前期で、86.5%、後期で、87.6%に上り、
総じて授業満足度が高いことを示している。教授者側の授業改善の努力が成果を上げてきているといえよう。

高い授業満足度の理由を問う設問４では、「授業がよく理解できたから」、「授業がまあまあ理解できたから」と回答した教育学部の学生の割合は、前期で、71.8%、後期で、71.1%に上り、授業理解が満足度を高めている大きな要因であることがわかる。

一方、低い授業満足度の理由を尋ねる設問５では、授業が全くないしあまり理解できなかったと回答する教育学部学生が、前期で、33.6%、後期で、38.3%であったが、授業の難易度の課題もあると思われるが、学生の基礎学力の不足に起因するとも考えられ、基礎的学力の向上が課題となろう。また、「学修が有意義でない」あるいは「学修意欲が喚起されなかった」と回答した教育学部学生の割合が、前期で、56.0%、後期で、52.4%に上っている。この結果をみると、教授者側の授業改善の一層の取組が求められることを示唆しているものの、学生側の「学ぶことの意義付け」、「学ぶ意欲」の乏しさを反映する数値でもあり、これらをどう喚起していくかが大きな課題である。

授業の予習・復習時間を問う設問６では、教育学部の学生は、受講に向けての予習・復習時間について、全くしなかった者は、前期で、59.3%、後期で、55.0%、また、30 分程度が、前期で、25.9%、後期で、27.7%に上り、全体で、30 分程度以内の予習・復習しかしない学生が、前期・後期とも 80%を超える結果となっていることは、教育上憂うべき状況にあるといわざるを得ない。これでは、本来の単位付与の条件を満たしていない。学生の主体的・積極的な学修への取組を促すことが大いに求められているといえよう。

（教育学部長　樋口　修資）

７）経営学部

①　経営学部長による総評

各質問に関するコメントを示す。
［１：この授業へのあなたの出席状況について答えてください。］という設問に関しては、「毎回出席した」と「２／３より多く出席した」の合計が、前期では 98.5%、後期は 99.3%と前期、後期ともにほぼ 100%に近い学生が高い出席率となっており、授業に対する熱心な態度を示している。
［２：この授業の内容はシラバス（授業計画）通りのものでしたか？］という設問に関しては，前期 86.0%、後期 87.6%が「全くシラバス通りだった」、「おおむねシラバス通りだった」と回答しており、教員の授業はほぼ計画通りに進められたと評価されている。
［３．この授業に対するあなたの満足度について答えてください。］という設問に関しては，「大変満足している」、「まあまあ満足している」が前期 87.7%，後期 87.8%」と，高い満足度を得ており、教員の授業については高い評価を得ている。
「４．『設問３』でその満足度の理由」を問うと「授業がよく理解できたから」、「授業がまあまあ理解できたから」が前期 83.3%、後期が 86.2%と回答しており、教員の講義の平易さが評価されているようである。
［５．『設問３』で「授業が満足できなかった学生の理由」は、前期では 34.7%、後期が 28.3%と「授業があまり理解できなかったから」と答えた学生が多かった。学生の理解力を高める工夫が今後の課題と思われる。
「６．あなたは１回あたりの授業に対して、予習・復習をどの程度しましたか？」の質問に対しては、前期は 90 分以上が 8.1%、90 分程度が 6.2%、60 分程度が 11.7%で、60 分以上が計 26.0%であったものが、後期では 90 分以上が 10.8%、90 分程度が 5.9%、60 分程度が 12.8%と計 29.5%に増えており、大きく改善されていることがわかった。
「７．あなたはこの授業がより良いものであるためには、どのような授業であったらよいと思いますか？」の質問に対しては前期後期ともに１位は「おもに知識や技能・技術を学ぶ授業」であり、前期 37.9%、後期 36.0%だった。以下２位も前期、後期ともに「知的に面白いと思える授業」が 15.9%、15.8%で、これら２つが学生の興味関心を引く授業であることがわかった。
　総合的にみると学生の授業に対する満足度や理解度は高いものが示され、授業へ臨む態度も改善されつつある。学問への興味関心の度合いも大きなものが見られ、良好な学習効果が現われていることがアンケートの結果から判断できた。

（経営学部長　若木　宏一）

８)デザイン学部

① デザイン学部長による総評

出席状況については前期より後期が、「全出席」の割合は下がってはいるが、「毎回出席した」「2／3 より多く出席した」が 98.6%であり、前期・後期ともに高い割合を示している。この結果からは大きな問題は見受けられない。

シラバス（授業計画）については、「全くシラバス通りであった」「おおむねシラバス通りであった」は前期 88.8%、後期 89.1%であり、「シラバスを読んでいない」と回答した割合も全学的にも低い。これは最初の授業でシラバスを履修者に配付して授業内容を説明していることと、変更する場合も授業内で必ず説明するよう徹底している結果と考えられる。

授業に対する満足度については前期より後期が、「満足度」の割合は多少下がってはいるが、「大変満足している」「まあまあ満足している」は前期 90.3%、後期 88.1%と安定して非常に高く、通年で見ると全学的にも高い。これは恒常的な授業改善を徹底している結果と考えられる。

予習･復習については、全学的に見ても予習･復習をしていると回答した割合は高い方ではあるが、デザイン学部の多くの科目（特に演習・実技系科目）は毎回のように予習・復習を踏まえた課題があり、実際にはアンケート結果よりもはるかに多くの授業時間外学習を行っている。

昨年同様に授業アンケートの結果は総体的に良好であると思われるが、次年度についても授業改善の更なる強化を目指したいと考える。

（デザイン学部　田中　久隆）

９）心理学部

① 心理学部長による総評

１．結果の概観

⑴回答率は、前期が 50.2%、後期が 55.0%で、良好とは言えないが、後期の回答率は昨年度後期の 40%台よりも改善した。

⑵授業内容のシラバスへの準拠（設問２）については、「全くシラバス通り」と「おおむねシラバス通り」の選択率を合算すると、前期では 86.1%、後期では 85.8%となり、85%以上の学生が「シラバス通りに授業が進行した」と捉えていた。これらの値はともに、昨年度の同学期より向上している。各年度・学期ごとに、学生の理解度との関係において授業進行は変動し得ることを勘案すれば、授業計画としてのシラバスは、当学部ではかなり有効に機能していると考えられる。

「シラバスを読んでいない」との回答は、前期では 12.2%、後期では 10.3%であったが、これらは、昨年度前期 35.3%、後期 46.0%から大幅に改善している。当学部でこれまで取り組んできた新入生・在学生への教務委員による構造的・体系的な履修ガイダンスの成果と考えられる。

⑶授業の満足度（設問３）については、「大変満足」と「まあまあ満足」の選択率を合算すると、前期では 88.9%、後期では 88.7%となり、９割近い回答が授業への満足を示している。これらの値はともに、昨年度の同学期の値（前後期とも約 86%）より向上している。

⑷授業への満足の理由（設問４）としては、「授業がよく理解できた」と「まあまあ理解できた」の選択率を合算すると、前期では 70.7%、後期では 75.0%となって前後期ともに 70%を超えており、「授業内容の理解」が高い満足度（設問３）を支えていると考えられる。

⑸一方、設問３における「あまり満足していない」と「全く満足していない」の選択率を合算すると、前期では 7.6%、後期では 9.6%であったが、それらのうち、「学習意欲が喚起されなかった」を低い満足度の根拠とした回答が、前期 34.6%、後期 27.5%を占めていた（設問６）。この選択が、「自己に内在する『意欲』が何らかの外的要因によって『喚起』されなかったことを不満足の根拠と見なす」他罰的・受動的態度の表明であるならば、このような選択を行なった学生については上級学年での自律的・能動的修学の実現が危ぶまれる。

⑹授業外の自主学習の頻度（設問８）については、予習・復習をしているとの回答が前後期とも 40%台に留まる一方、「しなかった」回答が、前後期とも 54%に達しており、授業内容の定着が危ぶまれる。

⑺心理学科で独自に設定した、教員の授業技術への要望を問う設問（設問１１）については、「特に希望はない」が、前期では 67.5%、後期では 62.6%を占めている。これらは昨年度より高い値である。

⑻心理学科で独自に設定した、教員の授業運営に関わる設問（設問１２）については、「特に希望はない」が、前期では 75.9%、後期では 77.0%を占めている。これらは昨年度より高い値である。

２．結果を踏まえた改善方針（⑴～⑻は、上記１の各番号に対応）

授業アンケートの実施目的は、教員に授業改善のための気づきの機会を提供することである。

学生からの要望のうち、①授業方針・授業内容に関わる事項は、「カリキュラムポリシーやディプロマポリシーに照らして、また、カリキュラムにおいて当該科目が果たすよう計画されている役割に準拠して、担当教員が主体的に決定すべき事項」であるから、学生の要望だけを根拠として、或いは学生の要望に沿うことだけを目的として軽々に変更することはできない。従って、学部長から各教員に、当該科目の授業方針・授業内容が、カリキュラムに準拠しているか否かについて、今一度丁寧な振り返りを促す。一方、②授業時間管理・補助資料など、授業の技術的側面に関わる事項について、学生からカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに照らして合理的かつ建設的な要望・改善案が示された場合には、各教員の振り返りに基づく自発的改善に期待するとともに、学部長から各教員に改善策の検討を求める。

以下に、上記「１．結果の概観」の事項番号に対応づけて、改善方針を述べる。

⑴回答率の改善に向けて、複数回の授業において実施案内を行う。

⑶～⑸については、設問３および設問４の結果から、授業内容や授業技術など教員が直接改善できる面について各教員が改善の取り組みを進めるとともに、授業を成立させるもう一方の主役である学生諸君にも主体的・自律的に授業に参画してもらえるよう、年度当初の履修ガイダンスにおいて、「授業の進行計画」としてだけでなく「個々の授業の目的や学生の到達目標を示した学びの指針」としてのシラバスの意義について周知するよう、次年度も継続して取り組む。

⑹授業外の自主学習の頻度（設問８）については、科目の特性に配慮しつつ、予習・復習の重要性やその効果について、一層丁寧に指導していく必要がある。授業外の学修についてはシラバスに記載しているが、シラバスを熟読して授業に臨むよう履修ガイダンスで指導する。

⑺心理学科で独自に設定した、教員の授業技術への要望を問う設問（設問１１）については、各授業科目の担当教員が、学生からの要望を「カリキュラムポリシーやディプロマポリシーに照らして、各授業目的の達成のために合理的かつ建設的である」と認めた場合には、各担当教員の責任においてそれら要望を取り入れ自発的に授業を改善する取り組みを進める。

⑻心理学科で独自に設定した、教員の授業運営への要望を問う設問（設問１２）についても、各授業科目の担当教員が、学生からの要望を「カリキュラムポリシーやディプロマポリシーに照らして、各授業目的の達成のために合理的かつ建設的である」と認めた場合には、各担当教員の責任においてそれら要望を取り入れ自発的に授業を改善する取り組みを進める。

以上

（心理学部長　境　敦史）

１０）全学共通教育委員会

① 全学共通教育　委員長による講評

授業アンケート結果のうち、主に【設問３】の授業に対する満足度に注目したい。全学共通教育の授業の満足度が前期は（大変満足 37.7％・まあまあ満足 45.5％）で、大学全体（38.8％・45.5％）と比べてやや低いが、後期は（大変満足 43.3％・まあまあ満足 43.3 パーセント）で、大学全体の（41.0％・44.8％）より高めである。大学の授業に馴染んだためであろうか。

全学共通教育の中では選択科目と語学科目を取り上げる。選択科目では前期（大変満足 31.0％・まあまあ満足 48.1.％）後期（36.5%・46.0%）と大学全体に比べ満足度がやや低い。不満を持つ理由として前後期とも「学修に有意義でないと思ったから」の項目が大学全体よりやや高い。大学生に求められる教養として、自分の専門以外の科目もバランスよくとらなければならない必要性をより説明すべき義務を感じる。

語学教育のうち英語の満足度は前期は（大変満足 36.2%・まあまあ満足 45.6%）とやや低いが、後期は（大変満足 43.2%・まあまあ満足 43.9%）と大学全体と比べてもやや上回っている。大学の英語授業に慣れたためかもしれない。もっとも個別のアンケート結果を見ると、個々の学生の学力の差による他に、それぞれの教員による差異がかなり大きい。特に今年度、外部委託講師の事情から、頻繁に教員の変更があったクラスの学生については、申し訳なく思う。

特筆すべきは独仏中韓日の語学を選択した者の満足度が、前期（大変満 55.5%・まあまあ満足 37.7%）後期（65.7%・28.4%）と、大学全体や英語と比較しても際立って高いことである。これらの語学では、教員一人当たりの学生数が少ないので個々の学生に目が行き届きやすいという理由もあろう。また、英語以外の語学を積極的に選択したという本人の自覚も、学習意欲に反映されているものと考えられる。

（全学共通教育委員長　山本　陽子）